

## 秋田におけるチーフ会議の思い出

福田 武 雄

生産研究の観測ロケット特集号に紙面を与えられたので、この機会に、昔のことを思い出してみた。筆者が所長を拝命してから1カ月もたたぬ昭和33年4月23日の朝、はじめて観測ロケット打ち上げ視察のために秋田に着いた。このときは、カップ150Tと2段式のカップ5型の打ち上げが予定されていた。150Tは、2段式のカップ5型および6型のメインロケットになるものであって、4月24日、1号機と2号機の2機が快晴のもとに発射され、両機とも正常に飛しょうし、テレメータ・レーダとも完全に作動して、実験の目的が十分に達成された。

しかし、その次に予定されていたカップ5型、これは直径150mmのメインロケットに直径220mmのブースタを付けた2段式であるが、これについて、空気力学上の安定性に不安があるとのことで、4月26日の夜、秋田県の議員公舎でチーフ会議が開かれ、熱心な検討と論議が行なわれた。このチーフ会議には筆者も出席した。2段式のものとしては、それまでカップ3型や4型が実験されたが、いずれもロケットそれ自身の飛しょうに異状があって失敗していることの原因についての、ある一つの理論づけが、ようやくその時にまとまり、それから判断すると、カップ5型もあぶないということであった。それで、5型は、今回は打ち上げずに東京に持って帰り、十分な検討をし、必要ならば改造を加え、安全性を確認するまで打ち上げを見合わせべしという強い主張もなされた。筆者は、この方面でしろうとであるので、研究者の方々の熱心な討論を聞いていたが、カップ5型をそのまま打ち上げてうまくゆくかどうかの確率について質問すると、それは50—50ぐらいであるとのことであった。

ここで筆者は、門外漢ながら、何事によらず、事前に100%確実なことが確認されるならば、わざわざ実験をする必要はないのではないか、50—50でうまくゆくかどうかわからない時にこそ、実験をする必要があり、価値があるのではないだろうかとのべた。また、その当時のわれわれの研究は、測地学審議会長から文術測第1113号をもって文部大臣に発せられた要望に基づき、昭和30年11月9日付文大術第652号をもって文部省大学学術局長から本学矢内原総長に発せられた「国際地球観測年の際のロケットによる観測の協力について(依頼)」に基づいて実施されてきたものであって、国際地球観測年、すなわちIGYは、その年(昭和33年)の12月で終了することになっていた。したがって、そのときカップ5型の発射実験を延期することは、時間的にみて、わが国のロケットによるIGYへの参加を放棄することを意味することになるので、筆者は、この際、思い切って5型の発射実験を予定どおり実施すべきであるとの意見を述べた。その後熱心な討論がなされたが、結局において、チーフ会議の議は筆者の主張の方向にまとまり、実際に、4月29日の朝、カップ5型1号機が発射された。

上記のような重大な決定をしておきながら、所用のため前日の28日に帰京していた筆者は、内心ではおそらくうまくゆくであろう、しかし、もし万が一、事故でも起きた場合には十分その責任をとる覚悟でいたが、4月29日の正午のラジオのニュースで、カップ5型1号機の飛しょう実験が成功したことを聞き、ホッと安堵するとともに、前途が明るくなったように感じ、さっそく秋田のロケット班に祝電を打った。

このカップ5型1号機は、ロケットの飛しょうとテレメータの作動は完全であり、レーダが若干不良であったが、続いて5月25日に打ち上げられた2号機では、全部満足すべき結果が得られた。その後、検討が加えられ、IGY本観測には直径150mmのメインロケットに直径245mmのブースタを組み合わせたカップ6型を使用することが決定され、昭和33年6月以降、6型の飛しょう実験に成功の後、12月23日までに9機の本観測用6型によって、なかには不十分なものもあったが、気温・風・宇宙線・気圧などの観測が実施され、IGYの期間中に僅かながらも寄与することができた。

その後、観測ロケットの事業は、所内外の関係者各位のご努力によって、6型による各種の観測のほか、昨年には8型によって高度200kmまでの観測が成功し、本年春には3段式の9L型が350kmに、ロクーンがはじめて100km以上に達するなど、いよいよ進展してきた。ここにいたるまで、IGY終了後の方針について、たとえば昭和33年6月19日および8月5日、総長室において兼重日本学術会議特別委員会委員長・河田航研所長・岡野文部省学術課長などの会議での決定事項あるいは所内における同年9月17日開催の教授総会での協力方針の議決など、記録すべき多くのことがあるが、当所の観測ロケット研究進展を左右したと思われるいわゆる“決定的瞬間”の一つとして、昭和33年4月26日の秋田におけるチーフ会議をとり上げて、ここに記した次第である。

(1961年7月3日受理)